

「室内環境の事典」

一般社団法人 室内環境学会 編

550ページ，定価12,000円（税抜）
（一般社団法人 室内環境学会，2023年9月1日発行）

学会の前身となる室内環境研究会発足から数えて30周年の節目を迎えるにあたり，昨年室内環境の事典が刊行されました。節目の年に，本書の書評をさせていただきとても光栄に思うとともに身の引き締まる思いです。

私たちが1日の多くの時間を過ごす室内の環境は，安全安心で快適であることが求められることは，いつの時代にも変わらないことと思います。2019年に発生したCOVID-19は瞬く間に世界中に広がり，行動変容を余儀なくされ，一般の人々までも感染対策としての換気や二酸化炭素モニタリングといった室内環境への意識が急速に高まりました。また，室内環境におけるwell-beingに対する認知や意識が高くなり，世界中で健康や快適な環境を評価する認証制度（CASBEEウェルネス，WELL認証等）が普及してきています。度重なる感染症の発生や室内に求める人々の意識変化などを知るにつけ，本書の重要性がますます高まっていくと感じています。

私は，仕事を通して室内空気質の調査・測定に携わっており，室内環境と聞くと，まず化学物質や健康影響に意識が向きます。おそらく建築に携わる方は，換気，建材，内装，照明，食品衛生に携わる方は真菌や細菌，製造業に携わる方は粉じん，ビル管理に携わる方は空調，温熱環境などに関心を持たれると想像します。このように，室内環境は専門性の幅がとても広い分野です。本書は，様々な専門分野の総勢100名を超える先生方が執筆され，多岐にわたる要素を網羅した内容になっており，室内環境を知るには，まず，この1冊があるととても便利と感じます。また，本書は，1項目について見開きの読み切り形式で解説しており，とても事典として“使いやすい”印象を受けます。

さて，本書は総論から始まり，各論として個別要素（生物，化学，物理），その後に健康影響，研究手法，対策，実践との構成になっています。第1章の総論では歴史や地域，大気汚染や土壌汚染などとの関係性などが説明され，第2章の各論に展開されていきます。各論は各々の要素についてわかりやすく説明されています。また，研究手法，対策技術，対策の実践が示されており，先行研究の確認，適切な測定法の検索，課題に対する対策検討など，皆様の悩みを解決するために最初に読むべき書であると思いました。また，1章15項のウェルネスや8章17項の避難所の対策など必要とされている最新の知見も盛り込まれています。近い将来，自動運転により，車内は運転する空間から快適に過ごす空間に変わると思います。8章14項で紹介されている車室内空気質は，私自身とても興味のあるテーマです。

室内環境は様々な要素が関係し，かつ変化しながら成り立っている環境です。様々な課題に取り組む，すなわち，事実を把握し，原因を究明し，適切な処置を施すために，室内環境に関する包括的な知識は私たちを大いに後押ししてくれます。本書の序文でも述べられている通り，従来は分野ごとに研究がなされていたものの，複合化した室内環境は総合的に捉える必要があるとされており，室内環境に関わる全ての要素が盛り込まれた本書は，室内環境に向き合う私たちにとって力強い存在だと思います。知識の習得，問題解決，未来へ向けた新しい価値創造など，皆様の抱える課題解決に，是非，ご自身のパートナーとして本書を活用してみたいかがでしょうか。

（グリーンブルー株式会社 及川 雅史）